



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN
弘前大学附属図書館報 No.29 2009.5

目次

巻頭言 弘前大学附属図書館の60年	1
特集 「津軽領元禄国絵図写」について	4
特集 官立弘前高等学校資料について	6
lead-off 本との出会いを楽しむ〈第3回〉	10
lead-off 図書館に関する話題〈第3回〉	13
弘前大学出版会より新刊紹介	17
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	19

弘前大学附属図書館の60年

附属図書館長 長谷川 成一

新入生諸君、入学おめでとう。本年（平成21年〈2009〉）は、弘前大学創立60周年にあたり、諸君はまさに記念すべき年に入学したのである。附属図書館（以下、本館と略記）は、昭和24年（1949）5月、新制弘前大学が開学したのと同時に設置されたので、本館も60周年を迎えたことになる。本館にとっても、記念すべき年である。この記念すべき年の開始に当たって、本年4月15日には、官立弘前高等学校資料のなかに埋もれていた、18歳（数え年）の太宰治（本名 津島修治）の写真を公開したところ、全国的に新聞・テレビなどに取り上げられ、太宰の青春の肖像を所蔵している大学として、本学並びに本館の名前は広く知られることになった。



太宰治の写真をご覧になる
長女の津島園子さんと長谷川館長



太宰治の写真を公開（記者発表の様子）

本館は、前身校である官立弘前高等学校、青森師範学校、青森青年師範学校、青森医学専門学校、弘前医科大学（いずれの各校も旧制）の蔵書を基礎として出発した。発足時の蔵書数は、果たして何冊であったか。知っている方は、今ではほとんどいないであろう。約 53,000 冊である。現在は、図書 805,792 冊、雑誌 24,761 種、

電子ジャーナル 2,148 タイトルである（平成 21 年 3 月 31 日現在）。創立時の約 15 倍の規模の蔵書数に拡大し、東北 6 県の国立大学では、東北大学、山形大学について、第 3 位の蔵書数である。

施設などに関して言えば、昭和 31 年（1956）4 月 27 日の「東奥日報」記事のヘッドラインには「お粗末な弘大図書館」と見え、蔵書数の少なさは東北地方でもシンガリ（最後尾）をつとめているのに加え、火災が発生すれば、図書が全滅する危険のある分館も存在すると警鐘を鳴らしている。現在では、昭和 45 年（1970）に建設された鉄筋 3 階建ての本館 3,462 m²と昭和 59 年に増築した分 2,190 m²、その他あわせて延べ 6,102 m²。そのほかに医学部分館の改築もあって、施設としては他大学と比較して遜色ない規模に発展した。



旧本館（昭和 39 年頃）

ソフトの面では、平成 5 年（1993）4 月から学生の強い要望に応じて、土曜日の開館時間を延長し、同 8 年 4 月からは東北地方の大学ではじめて日曜開館を実施して、大幅なサービスの向上を図った。ついで昨年（2008）年からは、昼食時の時間帯のレファレンスサービスの実施、本館と分館の間の貸出・返却サービスのシステム化などを実施して、図書館利用の一層の向上を行った。

附属図書館 60 年の歴史を簡単に振り返ってみたが、本館は必ずしも順調な歩みを続けてきたわけではない。さらに現在解決しなくてはならない課題も多い。利用している学生諸君にとっても、決して満足の行くサービスを常時受けていると思えない面も多いことであろう。その足らざる部分を補うべく、昨年度から本館では、ロールプレイングを伴う研修を行って、本



応接に関するロールプレイング研修



諏訪田前学術情報部長の講演会

館職員の応接に関するスキルアップを図った。さらに、大学図書館に長年勤務しベテランのライブラリアンとして全国的に名前を知られていた諏訪田義美・前学術情報部長に、附属図書館員はどうあるべきかと題して講演をしてもらい、館員としての意識向上を図った。ハードの面において飛躍的な躍進を直ちに期待できない現状にあっては、本館として、本年も引き続き職員研修を重ねてソフトの面で

のスキルアップと館員としての意識向上を目指す所存である。その場合、私たちの独りよがり
に陥らないために、学生諸君並びに教職員の方々から忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いである。

最後に、図書館の存在を哲学的な見地から考察し、17世紀～18世紀にかけて活躍したドイツの哲学者ゴットフリート・ライプニッツ（Gottfried Leibniz 1646-1716）は、「図書館は人間精神の宝庫となるべきである」と述べている。本学附属図書館は、弘前大学における知の拠点・中枢として、学生・教職員並びに本館職員の方で、ライプニッツの言葉にある人間精神の宝庫にするべく努力・精進して行きたいものである。

（はせがわ せいいち）

特集

つがるりょうげんろくくにえ ずうつし 「津軽領元禄国絵図写」について

附属図書館長 長谷川 成一

弘前藩が江戸幕府に提出し、正本・写ともに失われたと考えられていた「津軽領元禄国絵図」の写が2008年8月に弘前大学附属図書館から発見された。同絵図には弘前城下をはじめ、約300の村名などが記載されており、主要交通路、白神岳などの山岳や河川、各村の村高も書き込まれ、当時の津軽領内の地理、経済などの膨大な情報が図中に込められている。原図の縮尺は、2万1600分の1である。



附属図書館3階に展示中のパネル（大きさは1／2）

されていた全国の国絵図の大部分が、天保国絵図を除いて焼失した。

現在、津軽領の国絵図としては、正保の写が県立郷土館に、天保の正本が国立公文書館に所蔵されているが、前述のようにこれまで元禄の国絵図は発見されていない。

絵図は縦3メートル38センチ、横3メートル96センチ。狩野派の絵師が、現在の津軽地方を中心とした当時の津軽領全域を描いている。

津軽領の国絵図は、正保^{しょうほう}国絵図（17世紀前半）、天保^{てんぽう}国絵図（19世紀前半）の両絵図が現存しており、当絵図は、両時代の空隙を埋める資料的な価値はもちろん、全国の国絵図研究などにも影響を与える貴重な資料として関係者の注目を集めている。

津軽領の国絵図は、資料上、作成が確認できるのは、正保、元禄、天保の3回だが、明治6年（1873）の皇居炎上により、幕府に收藏

絵図には、「元禄 14 年（1701）11 月 津軽越中守」との書き入れがあり、幕府が提出を求めた時期と一致する。また、正保国絵図にあった航路や松前領の記載がなく、正保期にはあった 3 つの郡（田舎・鼻和・平賀）を「津軽郡」とまとめて表記するなど、当時、弘前藩が幕府から示された元禄国絵図作成のマニュアルに従った記載が随所に見られることから、元禄国絵図と確認された。当絵図は、弘前藩が幕府へ提出しようとした最終段階の下図か、控図の写しとみられる。

絵図には津軽郡の石高が、10 万 3097 石 1 斗 5 升と記され、元禄時代には既に 10 万石以上の実高であったことが分かるほか、盛岡・秋田両藩との藩境が詳しく描かれ、当時の幕府が藩境の確定に意を用いた様子がうかがわれよう。

（はせがわ せいいち）

「津軽領元禄国絵図写」を一般公開

昨年 8 月に弘前大学附属図書館の郷土資料から発見され話題となった「津軽領元禄国絵図写」が、青森県立郷土館の特別企画展「新発見津軽領元禄国絵図」（会期 5 月 10 日～19 日）において一般公開された。

この企画展では、青森県立郷土館所蔵の「正保国絵図」、弘前市立弘前図書館所蔵の「天保国絵図関係資料」及び「慶安の御郡中絵図」など江戸初期から後期にかけての津軽領の主な国絵図も一堂に公開されており、江戸時代の津軽地方の村落や領内の移り変わり、江戸幕府の国絵図作成の意図の変遷を伺い知ることができた。タテ、ヨコ 3～4m 四方の巨大な国絵図の並ぶ展示会は全国でも珍しく、壮観であった。



青森県立郷土館ホームページ

<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html>

特集 官立弘前高等学校資料について

官立弘前高等学校資料の整理について

官立弘前高等学校資料整理作業チーム

官立弘前高等学校資料は、平成 20 年（2008）において、弘前大学に分散して保存・保管されていた。このたび、整理・調査の対象とした資料は、附属図書館と人文学部に保存・保管されてきた紙媒体を主体とするものであって、遺物・遺品を取り扱うことはしなかった。

附属図書館の資料類は、官立弘前高等学校（以下、弘高と略記）の学校財政に関わる帳簿類であり、もう一つは、新館 3 階旧制弘高スペースにあるキャビネット並びに展示ケースに納められていたオリジナルの資料類である。

人文学部の耐火金庫に収納されていたのは、文部省通達書類等、教務日誌、学籍簿、退・除籍者等、調査表、成績原簿、生徒名簿等、関係書類綴、卒業生関係書類綴、入学証書綴等であった。

平成 20 年、遠藤学長から長谷川附属図書館長に弘高資料の整理に関する要請があつて、同年 7 月 29 日、官立弘前高等学校資料整理作業チームを立ち上げた。整理作業は、長谷川館長を中心として、資料の整理をするチームと、作業を支えるロジスティック班に分かれて実施した。附属図書館新館 3 階で実施した整理作業は、7 月末から 8 月 26 日まで酷暑のなか進められ、各資料を一点ずつ中性紙の封筒



人文学部の耐火金庫より搬出

に入れて、内容の確認と摘記、調査を行った。その結果、総数で 1,055 点の資料を確認し、その後、長谷川館長が項目を立てて資料の分類を行い、小石川職員が資料名と内容摘記のカードを入力して目録化した。10 月には、仮目録が完成し、内容の確認と精査を経て、正式な名称を「官立弘前高等学校資料目録」と命名した。なお、長谷川館長が館内の貴重書類に弘高関係資料が残存しているかどうかを調査した過程で、「津軽領元禄国絵図写」を発見したことを付け加えておく。

平成 21 年（2009）2 月 19 日、官立弘前高等学校資料整理作業チームは、弘前大学事務局 3 階大会議室にて、弘前大学表彰を受け、遠藤学長から労いの言葉をいただいた。現在、当資料

目録は、弘前大学出版会から刊行するべく準備中である。3月末、附属図書館新館3階に自動消火設備を備えた「貴重資料保管室」が完成し、貴重資料に指定された「官立弘前高等学校資料」は、同室に保存されることになった。



遠藤正彦学長（前列中央）、三浦康久社会連携・情報担当理事（前列右から二人目）及び長谷川成一館長（前列左から二人目）他受賞した官立弘前高等学校資料整理作業チーム

近代日本の高等教育制度が明らかに！ ～大変貴重な官立弘前高等学校資料～

青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ 主査 中園 裕



長い間眠り続けてきた資料が突如目の前に現れた。弘前大学附属図書館に所蔵されていた官立弘前高等学校（以下、弘高と略記）に関する膨大な資料群のことである。弘前大学の前身ともいえる弘高は、大正11年（1921）に開校し、戦後の学制改革によって廃止されるまで、30年近く存続していた学校である。

今日の学校制度を知る人たちにとって、官立高校といってもなじみがないだろう。同じ高校でも与えられた役割が全く異なるからである。現在の高校は地域に密着した学校といえよう。これに対し官立高校は、近代国家が地域からの人材発掘を意図して設置した学校であった。弘前市に設置され、同市民が誇りとしていた弘高も、本質的には国家のための学校という側面をもっていたのである。

本資料群は、1. 文部省からの通達文書 2. 沿革関係書類 3. 教員関係書類 4. 学生

関係調書 5. 雑誌類 6. 経理関係書類 7. 写真類 の7分野に大別できる。弘高の運営全般に関する総合的な学校文書とってよいだろう。総点数は1055点にも及ぶ。その分量に驚くが、年次ごとに資料が継続的に揃っており、そのことが歴史資料としての価値を高めている。また全国的観点から見ても、体系的に官立高校の運営資料が揃っている事例は非常に少ない。

文部省からの通達文書は、官立高校に対する経営指導や教育方針などを記した文書で、最も歴史的価値の高い資料群である。通達文書は大正9年(1920)の弘高創立から、昭和25年(1950)の閉校に至るまで、ほぼ全時代にわたって揃っている。文部省の高等教育政策に関する運用実態が、十数冊の簿冊で概観できるのだから、これほど魅力的な資料群はないと思う。

これに対して、教務日誌や学生に関する調書をはじめ、校友会雑誌や同窓会会報、名簿やノート・教科書などは、教師の活動や学生の生活に関する資料として重要である。当時の学生の心理や生活ぶりがわかるので、多種多様な分野で活用できると思う。これらの調書類を丹念に読み解いていけば、弘高(その背後に国家)が地域に求めたエリート発掘の実態を明らかにできるだろう。写真帖や卒業アルバムも、当時の教員や学生の顔ぶれだけでなく、弘前市の街並みなどが確認できるので貴重である。

こうして見ると、本資料群は単なる弘高の運営資料という枠組みを超えていよう。その質と量において、近代日本の高等教育制度を概観できる価値があるといつてよい。弘前大学の附属図書館から発掘され目録まで作られたことは、同大学にとって大きな朗報である。弘前市民ないし青森県民にとっては、大きな財産になるだろう。

情報公開制度の定着により、公文書の研究が進む一方、大学文書館を設置する大学も出てきた。今や大学所蔵の資料は、様々な学問分野の研究材料として、地域の利益に大きく寄与する状況になりつつある。もちろん大学文書館や大学自体の地域貢献は、まだまだ緒に就いたばかり。弘高資料集の公開と活用は、こうした傾向の先端を行く試みになると思う。

(なかぞの ひろし)

官立弘前高等学校資料に 秘められていた太宰治

人文学部准教授 山口 徹



左の写真は、この四月十五日に弘前大学附属図書館で行なわれた記者発表後、各報道機関を通じ全国に配信され、いまなお話題を呼んでいるものである。この清新な印象の、微笑をたたえて前方を見据える青年津島修治が、あの^{たいとうき}類唐的イメージの代表格太宰治となるのかという驚きと、その逆に、太宰文学の根底にはやはりこのように純朴でひたむきな真面目さ、純粹さがあったのだという感慨をもたれた方も少なからずおられることと思う。

本年は太宰生誕百年ということで、複数の作品が映画化されたり、ゆかりある山梨や青森の文学館で大規模な特別展が行なわれたり、続々と関連商品も登場するなど、活況を呈している。折りしも本校の創立六〇周年にあたる今年、前身、旧制弘高卒業生であった太宰の未公開写真の調査・公開に該当領域の研究者として携わることができたのは望外の喜びである。

太宰治ほど作品と実生活の関わりとが取沙汰され、私生活の細部にいたるまで調べられてきた作家もいないため、調査・確認には覚悟をしたが予想をはるかに上回る時間と慎重さを要した。それまで本学の複数個所に分散して保管されていた官立弘高時代の^{ほうだい}龐大な資料が、このたび附属図書館にまとめて収蔵・整理されることになったのだが、その資料の山に文字通り埋もれながらこの証明写真に残されていた二つの数字の謎（太宰左肩上・写真右側に緑スタンプで16、写真左下角に銀の手書きで14）について^{はくそう}博搜した。このほか、官立高校時代の資料に秘められていた新事実など、関連資料を精査した結果については附属図書館編『官立弘前高等学校資料目録』（六月刊行予定）収録の拙論に記したので、興味のあるかたは御一覽願いたい。太宰文学の実質的な母体と目されてきた高校時代の、学校側の内部資料から今後どのように新たな太宰像が生まれてくるか、楽しみなところである。

（やまぐち とおる）

本と人の縁 偶然と必然

理工学研究科教授 有賀 義明



20代、30代の頃は、人と人の縁というものを考えることがなかったが、最近は、“偶然ではなく必然”というような表現を耳にして“なるほど”と思うようになり、人と人の縁というものを感ずるようになってきた。人と人の縁は、人生で重要な要素と実感するが、本と人の縁も大切な要素であると感じる。

昔から古本屋めぐりが好きで、初めて神田の神保町に行ったのは、中学3年生の時だった。母の実家が日本橋小伝馬町にあり、その頃、祖母が住んでいたのが夏休みに泊まりがけで出かけて行った時のことを良く覚えている。神保町には、古本屋だけでなく、三省堂や書泉もあり、のんびりブラブラしながら、ぶらり途中下車的な、本との予期せぬ出会いを楽しむには良い場所である。大学生になってからは、教科書や参考書を安く買おうと良く出かけたが、その当時、“温室効果”というような題目の本が古本屋の店頭でうず高く積まれていた光景を思い出す。地球温暖化という言葉は、今では誰でも知っているが、今から40年近くも前に、地球温暖化を先見的に論じていた本（人）があったことを思い出す。そして、その光景を思い出すたびに、地球環境や自然災害を考える時は、人間の目先の時間スケールではなく、地球の歴史的な時間スケールで物事を考えることが大切であると感じる。

本が眼に飛び込んで来る、タイトルの活字が眼に飛び込んで来るというような現象は、マン・ツウ・ブック（人対本）だからこそ起こる現象のように思われる。本との出会いを楽しむためには、目で見て分かること、肉眼で見られることが大事である。本屋や図書館などでの人と本の対面が大切であり、目で見て・手に取って・本をパラパラッとめくるところに本と人の巡り合いが待っている。電子媒体は、存在が既知の本の保存には優れているが、存在を知らない本との巡り合いには縁が薄いように思われる。

ところで、好きな本のジャンルは、空想科学小説とドキュメンタリーである。その理由は、空想科学小説に関しては“人が想像できるものは実現できる”（ジュール・ヴェルヌ、仏国の小説家）という点であり、ドキュメンタリーに関しては“事実は小説よりも奇なり”（バイロン、英国の詩人）という点である。これまでに会った本の中で、様々な事項を考えさせられた本としては、『抗命ーインパールⅡ』（高木俊朗著、文春文庫）や『天才の通信簿』（ゲルハルト・

プラウゼ著、講談社文庫）がある。『抗命—インパールⅡ』は、昭和19年のビルマ（現在のミャンマー）で行われた、インパール作戦での史実を扱ったものであり、将兵の生命を第一と考えて行動した師団長に焦点を当てた本である。有事・平時を問わず、人道的な行動、歴史の審判に耐える判断等の大切さを考えさせてくれる本である。『天才の通信簿』は、アインシュタインやエジソンなど、歴史的な天才や偉人の小・中・高校時代の成績が記述されている本である。小さい時から優秀な学業成績を残したケース、小さい時は落ちこぼれ状態だったケースなど、様々なケースが紹介されている。得意なところや良いところを見付け、それらを伸ばすことが大切ではないかと考えさせてくれる本である。

（ありが よしあき）



有賀先生がご紹介された、ゲルハルト・プラウゼ著『天才の通信簿』を本館で所蔵しています。

所 在：本館旧書庫5層

請求記号：372||P89

図 書 ID：90026641

古本市でのめぐりあい

人文学部准教授 飯 考行



東京にいた頃、大学最寄りの駅ビルで月初めに古本市が開かれていた。帰りがけに気が向くと立ち寄り、半ば暇つぶしに数百円の本を買い求め、電車内で揺られながら目を通した。学部卒業後、同じ大学の大学院に進学したため、その古本市とのつきあいも次第に長くなった。

気がつくと、いつの間にか、古風な随筆が部屋にたまっていた。読みやすく値段が手ごろだったためであろうか。こうした本は、たいてい売り場の片隅にまとめて置かれている。ややくせあせた外箱の並ぶ一角で足をとめ、見ず知らずの書き手の本を手にとって頁をめくり、日記など事実の羅列にとどまるもの、受け狙いのものや、教訓を連ねているものは、元の場所に戻す。あてどないお眼鏡にかなう基準は、その人の言葉で自然に綴られていることで、時を同じくして前衛的な音楽を聴いていたものの、文章の嗜好はなぜか保守的な方向に傾いていった。

何とはなしに気に入ったのは、石川欣一の著作である。初めに『ひとむかし』を手にし、内

容は、自身の何気ない生活、回想に過ぎなかったが、軽妙洒脱で惹かれるものがあった。『可愛い山』は、山へのそこはかたない思いを綴り、新書版も出ている。数々の翻訳を手がけ、従軍し、東京ライオンズクラブ初代会長だったことは、後に知った。河上徹太郎は、評論はもとより、中原中也、青山二郎や小林秀雄などの友人を記した文章や、日常を綴った随筆選『自然のなかの私』が絶品である。河上と親交した吉田健一は、独特の長い文体で知られるが、戦後間もない『乞食王子』などの随筆は簡明で清しい。詩人の室生犀星、小説家の色川武大（阿佐田哲也）、実業家の菅原通濟、東北ではフォークシンガーの三上寛、友川かずきのいわば本職外の文章も、意外に魅力的である。初期の岡部伊都子、獅子文六、小沼丹ほか、有名無名の書き手の随筆で、お気に入りのものは数知れない。専攻する法学を離れて、就寝までのつかの間、そうした文章を気の向くままに読み返すことが、現在のささやかな心の安らぎになっている。

以上、個人的な本との出会いを記してきた。最近は、インターネットでお目当ての本を購入することが多く、やや味気ないが、時間のあるとき、ふと弘前大学や市内の図書館、書店をさまようと、いまだに思いがけない出会いが待っている。生活の渦のなかに、いつの間にやら意にかなう本が引き込まれ、やがて立ち現れて、ともに親しく歩みを進めている思いがする。

(いい たかゆき)



飯先生がご紹介された石川欣一や河上徹太郎、室生犀星が書かれた図書を本館で所蔵しています。

例えば…

河上徹太郎著『河上徹太郎全集 第1巻』

所 在：本館旧書庫3層

請求記号：918.6||Ka94||1

図 書 ID：90435357 他

貴重資料保管室が完成

学術情報課長 酒井 量基

官立弘前高等学校資料を始めとする本学の建学に関わる文献、附属図書館が所蔵する津軽地方の歴史を検証するための貴重資料を良好な環境の下で保管し、教育・研究に供するため、附属図書館3階の視聴覚室（165㎡）を改修し、新たに貴重資料保管室が3月31日に完成した。

全体の広さは165㎡で第1保管庫、第2保管庫、作業・閲覧室それぞれ55㎡からなる。



貴重資料保管室



第1保管庫

第1保管庫は、貴重資料に指定された刊本、写本、稀少資料などの紙媒体資料を保管するため、常時60%以下の湿度に保つための空調設備を施した。

また、防火・防災対策として、最新の窒素ガス消火設備と資料を収納する書架には、転倒防止や落下防止対策を施した。

第2保管庫は、附属図書館保管の官立弘前高等学校で使用されていた教材、器材などの遺物資料を保管する。

作業・閲覧室は、文字どおり資料整理や閲覧用に使用するスペースである。

運用面では、資料を教育・研究等に活用できるよう閲覧、貸出し、出版物への掲載などについて「貴重資料取扱要項」を定めた。

また、収納する貴重資料については、附属図書館運営委員会に諮り決定される。3月25日に第1回の審査が行われ「津軽領元禄国絵図写」1点、「官立弘前高等学校資料群」1055点が指定された。今後、和書、中国書、洋書、郷土資料及び本学の沿革に関わる資料を調査していく予定である。



窒素ガス消火設備

お問い合わせは、情報サービスグループ（jm3162）まで。

（さかい りょうき）

貴重資料の利用案内

- 1 弘前大学附属図書館では、弘前大学の沿革資料・古文書・記録のうち、貴重資料取扱要項別表「弘前大学附属図書館貴重資料指定基準」に基づき指定された資料を別置き保管管理しています。これらの資料の利用にあたっては、個人情報の保護、資料の破損・劣化防止及び散逸防止のために、以下の条件の下で利用していただくこととしています。
- 2 閲覧日と時間
 - ① 閲覧日 月曜日～金曜日（休館日を除く）
 - ② 閲覧時間 午前10時～正午、午後1時～午後4時
- 3 閲覧方法等
 - ① 資料の閲覧は、館内の所定の場所で行なってください。
 - ② 閲覧を終了した資料は、職員の確認を受けてください。
- 4 貴重資料の閲覧及び複写・撮影を希望される場合は、所定の「資料特別利用許可申請書」を提出してください。なお、次の場合は、閲覧、利用を制限します。
 - ① 個人に関する情報の記載のある資料（公にすることにより、個人の権利・利害を害するおそれのあるもの）。
 - ② 当該資料の原本を利用させることにより、当該原本の破損もしくはその汚損を生じるおそれがあるもの。
 - ③ 特殊資料（大型資料で展開が困難なもの。その場合は、資料の写真版を閲覧することができます。）
- 5 資料の貸出しは、学術研究、教育等及び公共目的を持つ事業の用に供する場合であって、亡失・汚損に十分な配慮がなされていることを条件に、貸出しを受けることができます。
- 6 出版物・放映物（Web ページ含む）への写真掲載をご希望の方は、別に「出版物等掲載申請書」をご提出ください。当館で内容を審査したのち、掲載許可書を送付いたします。なお、出版物に掲載した場合は、掲載誌（本）1冊の寄贈をお願いします。

電子ジャーナルアンケート結果について

雑誌情報担当 中田 晶子

昨年10月、電子ジャーナル購読経費増加への対応として、教員の意向を把握するために電子ジャーナルの利用に関するアンケートを全教員対象に実施しました。このアンケートは電子ジャーナルの導入以来初めて実施されたもので、電子ジャーナルの整備計画を立てるにあたり、重要な参考資料となりました。

紙面の都合上、ここで述べるのは回答結果の概説に留めますが、回答結果の詳細は図書館ホームページ上で閲覧可能です。

(<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/local/kekka2008/kekka2008.htm> 学内限定)

アンケートの実施期間は平成20年10月17日～27日、調査方法は調査票を対象者に配布し、部局に設置した回収箱へ調査票を投函してもらう方法を取りました。

回答率は36%で、部局によりばらつきが見られ、電子ジャーナルの利用率が高い部局ほど回答率が高い傾向が見られました。

設問1の「電子ジャーナルは弘前大学の学術情報基盤として必要だと思いますか？」については、「絶対必要である」と「必要と思う」という回答が全体の92%を占め、電子ジャーナルの必要性が全学的に認識されている結果となりました。

設問2の「現在購読中の電子ジャーナルパッケージについて、今後も必要と思われるもの」については、ScienceDirectが72%、WileyInterScienceが56%、Oxfordが44%、Scienceが41%、APS-Allが17%と、回答率が利用件数にほぼ比例した結果となりました。

設問3-1は、個々の電子ジャーナルへアクセスするための利用経路を把握するために設けた項目ですが、アクセスするにあたって図書館ホームページの電子ジャーナルリストが一番活用されていることがわかりました。医学研究科や農学生命科学部では「データベースの検索結果から」という回答も多かったのですが、これについては医学・生命科学分野の無料データベースである『PubMed』の検索結果から購読契約中の電子ジャーナル本文へアクセスできるようにリンク付けを行っているため、利用者の多くが『PubMed』を利用していると推測できます。また設問3-2は、電子ジャーナルパッケージの利用頻度やタイトル数についての調査でしたが、ScienceDirectを週1、2回のペースで利用する利用者が多く、それ以外のパッケージは、利用する人と全く利用しない人に二極化する傾向があることが明らかになりました。利用するタイトル数については、ScienceDirectとWileyInterScienceについては平均3~5タイトル、OxfordとAPS-Allについては1~2タイトルを利用するという回答が約半数を占めました。ScienceDirectについては、平均10~15タイトルという回答も次いで多く、タイトルを多数利用する利用者も少なくないことが伺えます。

設問4のパッケージ以外の電子ジャーナルの利用状況に関する項目では、図書館で購読契約をしていないタイトルがいくつか挙げられていたため、個人購読しているかあるいはアクセス可能なバックファイルを利用している可能性が浮かび上がった結果となりました。

設問5は、今後整備して欲しい電子ジャーナルに関する調査でしたが、この結果、要望第1位となった「Nature」本誌が予算化され、平成21年4月から購読を開始しました。また「Nature」本誌のみならず、医学研究科を中心にNature関連誌に対する要望が多く、理工学研究科や農学生命科学部でもそれぞれの分野の電子ジャーナルに対する要望が数多く挙がりました。またジャーナルに混じってデータベースも多数挙がり、データベースへの要望も多いことが判明しました。

設問6の電子ジャーナルへの経費負担についての調査では、「全額を全学経費」が全体の44%を占め、全額経費での負担を希望する利用者が半数近くを占めていました。しかし「全額経費

と部局の受益者負担」も全体の 35%を占めていたため、受益者負担を支持する教員も少なからずいる状況と言えます。

今回のアンケートを通して、個別の教員の意識や利用状況が数値化され、教員の率直な意見が寄せられました。成果としては「Nature」誌購読の実現という形で反映されました。一方で、アンケート結果では ScienceDirect に次いで需要が高かったのにも関わらず、経費負担の目処がつかずに Wiley-Blackwell 社電子ジャーナルの購読を中止することになりました。

このアンケートは、設問や回答方法、実施時期を見直し、今後も継続的な実施を図っていきたいと思います。今後ともご協力をお願いいたします。

(なかた あきこ)

医学部分館リニューアルオープン

医学情報グループ 須田 久美子

医学部分館は改修工事のため昨年 8 月より医学部総合研究棟内の仮移転場所にてサービスを行っていましたが、竣工に伴い元の場所に再移転いたしました。また、本町地区の図書館資料の集約を図るため、保健学科分室と統合し、5 月 18 日より新医学部分館としてリニューアルオープンしました。改修工事中は、サービスの制限等で利用者の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。ご理解ご協力をいただき感謝いたします。

分館・分室の統合にあわせて、雑誌貸出期間の延長、館内へのカバン等の持ち込みを認めるなど、利用者サービスの改善も図りました。それぞれの図書館になかった資料がひとつの空間に納まることで、互いに補完し合う豊かな蔵書を構築し、利用者の皆様の学習や研究に貢献できるよう引き続きサービスの向上に努めて参りますので、今後ともよろしくをお願いいたします。

(すだ くみこ)



リニューアルオープンした医学部分館

弘前大学出版会より新刊紹介

弘大ブックレット No.5

「津軽から発信！国際協力キャリアを生きる JICA 編」

弘前大学人文学部柑本英雄ゼミ 4 年編 / 柑本英雄監修 / 佐藤菜穂子監修



人生のキャリア作りに欠かせない要素が 2 つある。1 つは自らの“戦略（自己）”、そして、もう 1 つは人との出会いが引き起こす“縁の力（他者）”だ。本書では、さまざまな立場で JICA と関わってきた「津軽出身の 3 人の国際協力プロフェッショナル」のキャリア作りを、講演者 3 人が読者に語りかける形式で紹介している。相馬多一郎氏は脱サラして中南米で青年海外協力隊調整員を、小形将樹氏はカンボジアで命がけの地雷撤去活動を、工藤倫代氏は若くして UNESCO 国際法規範の議論の現場を仕切るなど、それぞれが国際協力の第一線で活躍されてきた。本書には、3 人それぞれが人生の選択で直面した“不安や迷い”、“決断”までの細かいエピソードがふんだんに盛り込まれている。また、本書のもう 1 つ特筆すべき点は、大学 4 年生 4 人によって、この本が作り上げられたことである。就職活動と並行して「キャリア作り」の本の「編集作業」を行った彼らが得たものが何であったのか、読者はその追体験をすることができるだろう。

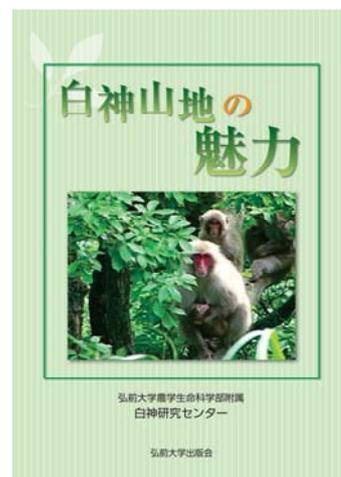
（柑本英雄ゼミ 4 年：赤平大寿・近藤麻衣・富岡昂・吉田美沙都
発行：初版第 1 刷 2008 年 12 月 6 日 / 第 2 刷 2008 年 12 月 26 日 / 定価 693 円）

「白神山地の魅力」

弘前大学農学生命科学部附属白神研究センター編

白神山地が世界自然遺産に登録され、その魅力を紹介する書籍は多数出版されている。学校教育現場でも、白神山地の紹介や教材としての利活用がはかられている。しかし、実際に小中学生を対象とした副読本的なものは少ない。こうした背景のもと、本書は、白神山地を研究対象にしている弘前大学の教員により書かれたものである。白神山地の猿や小動物、ホタル、シ

ラネアオイなどの昆虫や植物、微生物、遺伝子、土壌などの総合的な内容となっている。また、環境教育に関わりを持つ施設や環境教育に実際に取り組んでいる方々の事例も紹介し、現場で指導される先生方の利便性にも配慮した。さらに、図や写真を豊富にのせて、小中学生にも読みやすいように上梓している。白神山地について、親子で知るよい読み物ともなっているので、是非一読して頂きたい。



(発行：初版第1刷 2008年10月31日/第2版第1刷 2009年1月22日/定価1,050円)

「国立大学法人弘前大学仕事のしおり 平成21年度版」 弘前大学財務・施設担当理事 小川清四郎 編



「明るく」「楽しく」「一生懸命」大学のために仕事ができるように。

国立大学法人化後の管理運営や経営を支えていくためには、幅広い知識と志の高い意識を持った専門職としての事務職員が求められている。そのためには、「事なかれ」「前例踏襲」「規則万能」「年功序列」のような主義主張を改め、意欲・識見・能力ともに高い専門職集団に成長させることが必要である。弘前大学は、平成16年度の法人化を契機に事務改善・改革を

行ってきており、その一環として、弘前大学の職員が初心者向けに本書を執筆した。改革は、意識改革に始まり意識改革で終わると言われている。まず、本書を読んで基礎的な業務内容を理解し、知識として身につけて、業務執行上の非効率・不適切なシステムを改善するための一助として活用してほしい。

(発行：2009年3月30日/定価2,000円/弘前大学全職員に無料配布)

<お問い合わせ先>

弘前大学出版会

Tel:0172-39-3168

Fax: 0172-39-3171

E-mail: hupress@cc.hirosaki-u.ac.jp

本学関係者の著作で、図書館に寄贈された図書と資料の一覧

平成20年10月～平成21年3月受贈分

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
農学生命科学部	宇野 忠義	リンゴ農家の経営危機とリンゴ火傷病の検疫問題	弘前大学出版会	2007	2	本館
附属図書館	附属図書館	江戸城大奥と天璋院篤姫(DVD)	弘前大学附属図書館	2008	1	本館
名誉教授	牧田 肇	白神に棲む	弘前大学	1997	2	本館
	松木 明知	八甲田雪中行軍遭難事件の謎は解明されたか	津軽書房	2007	1	分館
元教授	福田 博之	果物をつくる	八坂書房	1995	1	本館
弘前大学	弘前大学	研究白書(2007)	弘前大学	2007	1	本館
弘前大学出版会	弘前大学出版会	未利用バイオマスとしてのリンゴ剪定枝の活用戦略	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
		情報系の確率・統計	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
		基礎物理学実験の手引き(平成20年度版)	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
		理工系学生のための数値計算の理論と実際(改訂第4版)	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
		白神山地の魅力	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
		津軽から発信!国際協力キャリアを生きる JICA 編	弘前大学出版会	2008	4	本館2 分館1 分室1
弘前大学生活共同組合	弘前大学生活共同組合	弘前大学入学記念アルバム(2008)	六甲出版	2008	1	本館

ほうせん



弘前大学附属図書館報「豊泉」第29号

発行日：平成21年5月25日

発行／弘前大学附属図書館 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 TEL 0172(39)3162

編集／弘前大学附属図書館広報委員会

委員長 長谷川成一(館長・人文学部)

委員 蔵田潔(分館長・医学研究科) 柴正敏(理工学研究科・平成21年3月までの任期)

谷口建(農学生命科学部・平成21年3月までの任期)

酒井量基(学術情報課) 長谷川友紀(学術情報課)

中田晶子(学術情報課・平成21年3月までの任期) 對馬英由子(人文学部・同左)

標題の「豊泉」は、明治9年の「仏国学制」付録上巻中の「人智ヲ広ムルノ豊泉アリ」の文に基づき、松原邦明名誉教授命名 題字：藤原楚水編「書道六體大字典」(三省堂)より